『平田牧場で働いていて考え方が変化したこと。人への関わり方の変化など』
山本：素で答えると私は前職で全く違う職についていて、生き物とは縁遠かったんです。池原は農業とか畜産の世界でしたけど。最初入った時に豚が生まれてくることにすごく感動したんですよね。私は一人目の子供の出産の時に出張で離れていたので、立ち会えなかったんです。なので平田牧場に来て、豚が生まれるところを見てすごく感激して。
そのことを家に帰って女房に話したら「あんた何言ってんの」って怒られて…（笑）
生き物が生まれて、それをお肉として販売して、そのおかげで会社として成り立っている訳で、社会の大事な役割を担っているんだけども、生き物を商品にしているということに自分の価値観や考え方が変化しましたね。それまで考えたこともなかった世界だったので。

池原：なかなか生き物の出産に立ち会う機会なんてないですからね。

山本：家で猫も飼ってたけど猫が子供を産むのとはまた違って。
屠畜場に行くと今まで鳴いてた豚がある瞬間から横たわってお肉になってくっていう。そういった場面も我々の中では日常で、今日豚が生まれるし今日豚がお肉になるっていう。重たい話なんだけどそれで私達は生きているんですよね。

池原：生産部に入った時に、大学で畜産を専攻していてその頃は牛を扱っていたんです。一度家畜に触れていた状態で入社して、養豚の現場に配属されていざ農場で働き始めるっていった時に、豚がたくさんいて「かわいい」って思ったんですけど、その時の上司に「これから扱う豚ってかわいいけどペットじゃないから」「食べ物になっていく動物だから大変だと思うけど、気持ち切り替えてやってくれな」って最初に言われて。ペットとは違うのは当たり前にわかってはいたんですけど、そこでもう一度気が引き締まりましたね。
もう一つは私が携わっている飼料用米が特に当てはまるんですが、会社で働くことって何とも思わないで過ごしていると、朝会社に出勤して、業務して、退勤して、月末にはお給料をもらって、っていう自分中心の生活スタイルが普通なんですけど、飼料用米とかやると会社っているの給料をいただくところじゃなくて、会社のやってる社会貢献・地元貢献のことを理解した時に「地元に愛される会社になるために会社って頑張っているんだな」と感じました。それからは仕事への熱意が高くなりましたね。

山本：そうだよね。社会に必要とされているから企業活動が続けていける。

池原：仕事への考え方が変わったのは飼料用米の仕事をしたからかなと感じますね。

山本：平田牧場は食べ物の会社なんですよね。私が学生の時はお金もないから毎日レトルト食品やカップラーメンなんかを食べてて、お腹がいっぱいになればいいやっていう食事への考え方を持っていたんですよね。だけど、平田牧場に入ってお腹がいっぱいになるだけの食事じゃだめだって気づきました。

私達が食べているご飯が明日の自分を作ってくれるわけで。何を食べなきゃいけないか、今でこそそういった情報はたくさんあるからこういった食品を摂りましょうって分かるけど、平田牧場は大きな告知力の無い昔からそういった取り組みをしてきていて、明日食べるものはきちんと考えようという取り組みをしてきていて、私も入社して大きく考え方が変わった所ですね。庄内に来てから我が家の食事も大きく変わって豊かになったと思います。

池原：社会人になると学生の頃とガラッと変わりますもんね。
バイトで最初何をすればいいか分からなくても仕事をしているうちに分かるようになるのと一緒で、社会人の仕事もその延長戦だと思うので。

『仕事の中で特にこだわっていることは何か？』
山本：広報の視点で行くと、平田牧場はこだわりの強い会社なんですね。色々な事業をやっている会社なのでそれを 1 から 100 までぜんぶお伝えできればいいんだけど、中々そうはいかないので、その内のどこをどうやって伝えていくか、なるべくかんたんに分かりやすく伝えてファンを広げていくっていう所はすごくこだわっていますね。仮にぜんぶ言ってもぜんぶ伝わるわけでは無いので。

池原：私は研究開発という仕事をしているので、正確で丁寧な仕事を徹底的に行うことを心がけていますね。例えば、こういうデータが欲しいという依頼があった時は、依頼者に満足してもらえるように依頼者が求める出来栄え以上のものを返せるように心がけています。そのために一生懸命に仕事に取り組むことを常日頃心がけています。

『飼料用米プロジェクトを始めたきっかけ。プロジェクトによってどのような影響があったか（池原さんへの質問）』
池原：平田牧場は創業の新田家が庄内地域の地主で、田んぼもたくさん持っていて、その派生として養豚が行われたんですね。お米の飼料米化というのは昔から考えられていて、新田家の間では飼料米の取り組みはずっとされてきていたんです。それである時、平田牧場が多く豚肉を提供させていただいているのが「生活クラブ生協」さんという関東を本拠地とした共同組合の一つなんですけども、「生活クラブ生協」さんも食にこだわりを持っていて、環境であったり社会運動に課題・目的意識を持って取り組まれる所なんですね。ずっと会社としてお付き合いされていく中で毎年組合員の方が産地を見にいらっしゃって交流をしていくんですけど、その際に庄内に広がっている田んぼなどを色々見て回られるんですけど、減反がひどかった時に空いている田んぼってなんで何もうえないんですか？もったいなく無いですか？といった話が出て。

山本：減反は当時の国がお米を作るな。作らなければお金をあげるよっていう政策だったんですよ。だから農家は泣く泣く作らない、けど収入は維持できるっていう政策だったんです。

池原：当時は今じゃ考えられないような不思議な状況だったんですが、「なら空いている田んぼで作ったお米を豚にあげればいいんじゃない？」「そしてその豚肉を私達が買えばいいんじゃない？」と言ったアイデアから始まったのがこの飼料用米プロジェクトだったんです。そこから日本の自給率を向上させる取り組みとして非常に評価され、モデルとして年々取り組みが大きくなり今に至るといった形です。

山本：平田牧場は飼料用米のパイオニアで先進地だから、2000 年から 2010 年にかけて取材ラッシュで、テレビ局もくるし、特に全国各地の行政・農協・農家が代わる代わる押し寄せて「どのようにしたらそんなに上手くいくのか」と視察されて、その都度案内したりして毎月取材を受けている状態でした。そこから今では全国で飼料用米の取り組みが全国に広がっていきました。

池原：農家さんとしては飼料用米に補助金がつくようになって、持っている田んぼに稲を植えられるという満足感もあるでしょうし、名前は違えど飼料用米と同じ取り組みをしている農家さんが庄内地域にはたくさん居て、平良牧場の取り組みが庄内そして全国に広がったことで多くの農家さんへの貢献もあったのかなと思いますね。
豚さんにお米を食わせる取り組みはいいけど豚肉の味が落ちたら元も子もないので、豚肉を美味しくするための試験をどんどん繰り返していくことで、お米を与える、自給力を与える、お肉もおいしくなる、という形作りができたのかなと感じています。